

坂田寺池 SG100 出土の 土器群

—坂田寺第1次

1 はじめに

坂田寺池SG100から出土した土器群は、西弘海氏が示した7世紀の土器編年(飛鳥編年)の飛鳥Ⅱの標式資料として著名である。近年、奈良文化財研究所では、7・8世紀の土器編年の標式資料の整理・資料化作業を進めており、今回は、その一環として実施してきたSG100出土土器群の再整理作業の報告をおこなう。

坂田寺池SG100は、1972年に実施した第1次調査で確認され、その堆積土からは、瓦、木簡、木製品、金属製品、骨角製品とともに多量の土器が出土した¹⁾。本報告で紹介する資料は、大部分がSG100の「黒色粘土層」から出土したものであるが、一部に「バフン層」や「黒色土層」出土の土器を含む²⁾。後2者から出土した破片は、黒色粘土層出土の土器片と複数個体で接合関係が確認できたため、同等の資料として扱った。これら3つの層から出土した土器群は、型的なまとまりもよい。なお、出土層位の認定は、土器片に記された注記をもとにおこなった。

2 池SG100出土土器群の内容

SG100出土土器群は、ほぼすべてが古代の土師器・須恵器である。

土師器には杯A、杯C、杯G、杯H、皿、椀、鉢、高杯C、高杯H、甕などがある(図183~187)。

12~38は杯CⅠ。口径は14.5~18.0cm。一部には、口径が20.0cmに復元できる大型のものもある(13・14)。口径16.0~17.0cmのものが多くみられ、口縁部が8分の1以上残る個体23点では、17点がその大きさに該当する。その23点の外面調整は、a1手法が8点、b1手法が14点、不明が1点(口縁部にヘラミガキはあり)である。また、23点のうち、器高のわかるもの14点の径高指数は、28.6~33.8を示す。12の底部内面には、焼成後に刻線で「卍」が書かれ、28の口縁部外面には「知」の刻書がみられる。また、31の口縁部外面には刻線で「大」と書かれる。そのほかにも、線刻のみられるもの(21・22・25・26・29・34・36)が多くある。

1~11は杯CⅡ。口径は11.5~14.0cm。口縁部が8分の1以上残る個体11点の外面調整は、7がa1手法、1がb0手法であるほかは、すべてa0手法である。径高指数は、1・3が28.5、2が24.1、4が28.9、8が30.6。1の底部内面には「卍」の刻書があり、2・4・6・9~11には、記号の線刻がみられる。

39~50は杯CⅢ。口径は8.5~11.0cm。外面調整について、口縁部が8分の1以上残る個体20点をみると、a0手法が14点、a1手法が1点、b0手法が3点、不明が2点(口縁部にヘラミガキはなし)である。20点のうち、器高がわかる8点の径高指数は、45・47が29.0、44が35.0であるが、それ以外の5点は29.8~30.9にまとまる。45の口縁部内面には強い凹線がめぐり、39・44・48には、焼成後に施された記号の線刻が残る。

51~54は杯G。51は、杯Cのものと類似する精良な胎土である。52の内面には、縦や斜め方向の線状の工具痕跡が多く残る。

55~57は杯A。口径は、55が16.2cm、56が16.0cm。器高は、両者ともに6.5cmほどで復元した。55は口縁部が内傾し、外面にはヘラミガキを密に施す。内外面が黒色化し、口縁部外面には、焼成後に入れられた記号の線刻が一部残る。56は口縁部を丸くおさめ、内面に不規則なループ暗文と放射暗文を施す。57は口縁部上半を欠く。外面のヘラミガキは、口縁部下端にまで広範囲に施される。

58~111は杯H。口径には9.4~14.8cmの幅がある。口径14cm以上のものは、112のような脚がつき、高杯Hとなる可能性がある。底部外面の調整方法は、外周に分割ケズリを施した後、中央を一方方向のヘラケズリで仕上げを基本とする。杯C同様、杯Hにも焼成後の線刻がみられる個体(60・61・68・70・75・82~84・89・97・102・105・111)が多い。

高杯H(112)は、杯底部内面に「*」の線刻が残る。

113~122は高杯C。杯部内面の放射暗文は、いずれも非常に密である。113・114の杯底部内面、116の口縁部外面には、焼成後に施された記号の線刻が残る。

123~143は皿。器高が低い皿A(123~136)と器高が高い深皿(137~143)がある。皿Aの外面調整は、多くの個体がb1手法。内面の放射暗文は、123以外はいずれも密である。130の底部内面には、焼成後に書かれた「恵

妙」の刻書、134の底部外面には墨書がみられる。また、126・130には記号の線刻が残る。

深皿で、外面調整の確認できるものは、いずれもb1手法である。暗文構成には複数種があり、放射暗文やループ暗文を密に施す。137の口縁部内面と139の口縁部外面には焼成後に入れられた記号の線刻がみられる。

146～150は鉢。外面調整はb1手法を基本とし、放射暗文やループ暗文が密に施される。146の上段放射暗文では、U字状に施文している部分がある。鉢H(144・145)は口縁部と底部の境に弱い稜をもつ。

151は粗製の椀。外面には二次被熱による剥離やススの付着が認められる。

152～184は甕。小型品(152～165)の多くは、外面に二次被熱による剥離やススの付着がみられる。大型品(166～184)では、小型品に比べて、使用の痕跡を残すものは多くないが、167・176・179・183ではススやコゲの付着がみられる。176では、炭化物の付着が底部の破面にまでおよんでいる。172の口縁部内面には、焼成後に施された「米」の線刻が残る。

185～187は鍋。いずれも外面にはススが付着し、185の内面にはコゲがみられる。

須恵器には、杯H、杯H蓋、杯G、杯G蓋、椀、鉢、高杯、壺、壺蓋、甕、平瓶、甕などがある(図188・189)。

杯H蓋(188～202)の口径は、188が13.6cmであるが、そのほかは8.4～11.2cmの範囲におさまる。天井部外面の調整は、195では中央に一方のヘラケズリを施すが、そのほかはすべてヘラ切り不調整である。194の天井部外面にはヘラ記号と「卍」の墨書が残る。199は天井部外面に「×」のヘラ記号がみられ、漆で「大」の文字が書かれる。

杯H(203～211)は、205が口径10.5cm、受部径12.6cmとやや大きい。他の個体は口径が7.9～9.6cm、受部径が10.0～11.9cmである。底部外面は、確認できるものはいずれもヘラ切り不調整。203の外面には全面に自然釉が降着し、逆位で焼成されたとみられる。

杯G蓋(212～220)は、かえりの径が7.9～9.2cm、口縁部径が9.8～11.0cmの範囲にまとまり、頂部外面にはいずれもロクロケズリを施す。213の頂部外面にはヘラ記号が残る。

杯G(221～228)の口径は、228が11.0cmとやや大きい。が、

そのほかは8.8～9.4cmである。224・225の底部外面にはロクロケズリを施すが、そのほかはいずれもヘラ切り不調整。225は精良な胎土で、丁寧なつくりである。東海地方産の可能性³⁾がある。221の底部外面には、2条の直線状のヘラ記号が残る。

229は口径16.0cmに復元できる杯で、平底になると考えられる。底部外面をロクロケズリで調整する。

230～232は高杯。230は焼成が不良で軟質の仕上がり。口縁部中位に弱い段をつくり出す。口縁部しか残っていないが、脚がつく可能性が高い。

233・234は椀。233は外面に自然釉の降着が著しい。234は還元焰焼成が不十分で、黄褐色を呈する。口縁部が内傾し、底部外面の広範囲にロクロケズリを施す。

235は鉢。器壁は薄く、口縁部は内側に肥厚する。口縁部外面には、凹線が一条めぐる。

236は甕の胴部であろう。内面全面に漆が付着し、漆容器として用いられたことがわかる。黒色粘土層からは、漆の付いた破片が236以外に2点出土している。

237は壺蓋。つまみが低平で、口縁部が水平に短く突出する。外面には自然釉の降着が著しい。

238は壺。口縁部を短く立ち上げ、胴部には一条の凹線がめぐる。小型壺(239)は、胴部内外面をロクロナデで調整し、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。240は壺胴部。外面に列点文と凹線がめぐる。241は壺類の脚部。小円孔を穿ち、その上には一条の凹線が確認できる。242～244は、壺あるいは平瓶の口縁部と考えられる。243は自然釉の降着が著しい。

245・246は平瓶。246は肩部外面に、径1cmほどのボタン状つまみを付す。その周囲には竹管文が5ヵ所に残る。体部下端の一部には漆が付着し、破面にもおよぶ。

247～249は甕。249は体部中位で図上合成し、作図をおこなった。ナデにより、外面の平行タタキ目の一部を消している。

3 池SG100出土土器群の特徴

器種組成 SG100から出土した土器群の器種組成を表28にまとめた⁴⁾。比率をみると、全体の約8割が土師器で、須恵器の量は少ない。以下、SG100出土土器群の特徴をまとめる。

i) 土師器供膳具では、杯Cと杯Hが多く、杯Gは少

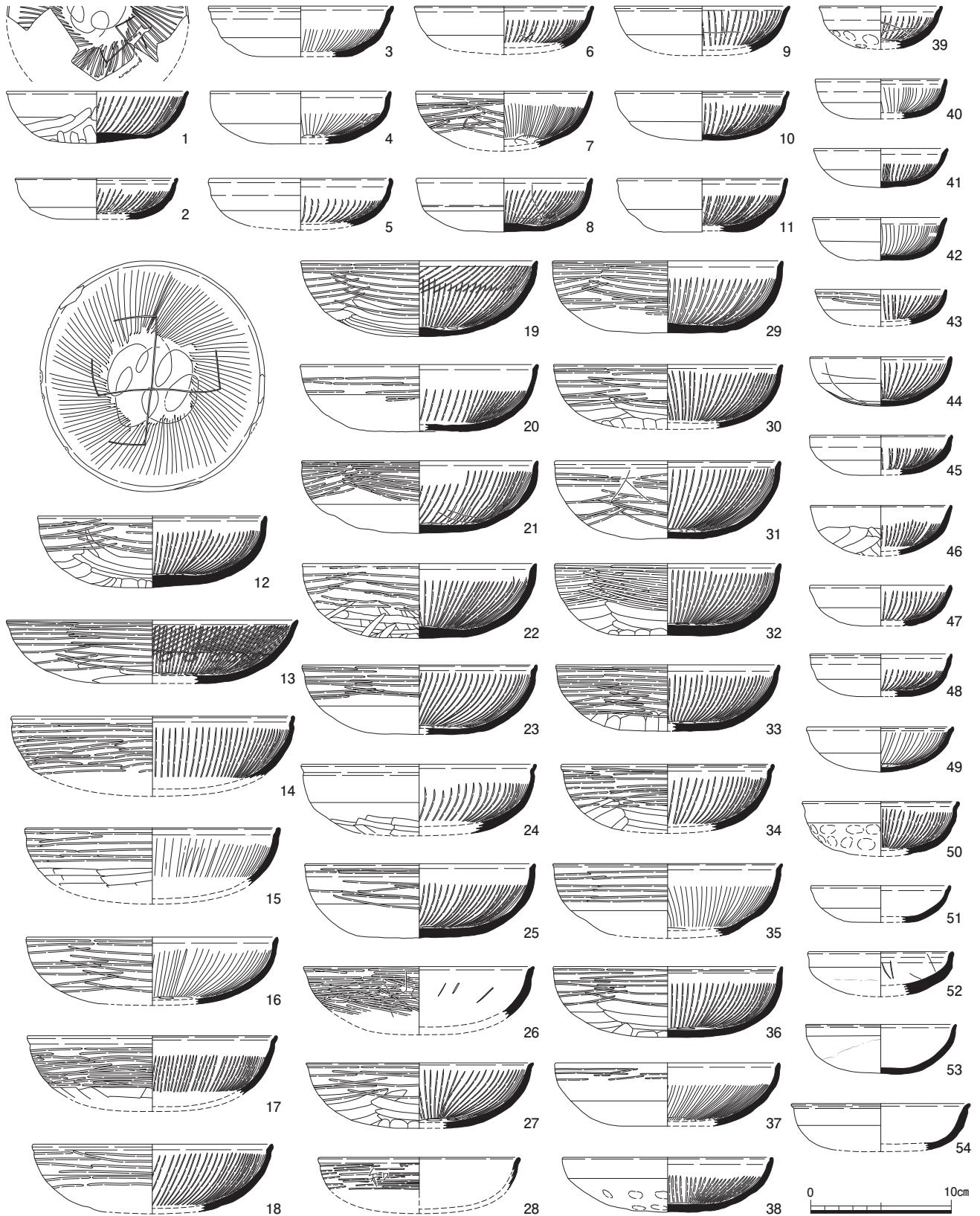


图183 SG100出土土師器(1) 1:4

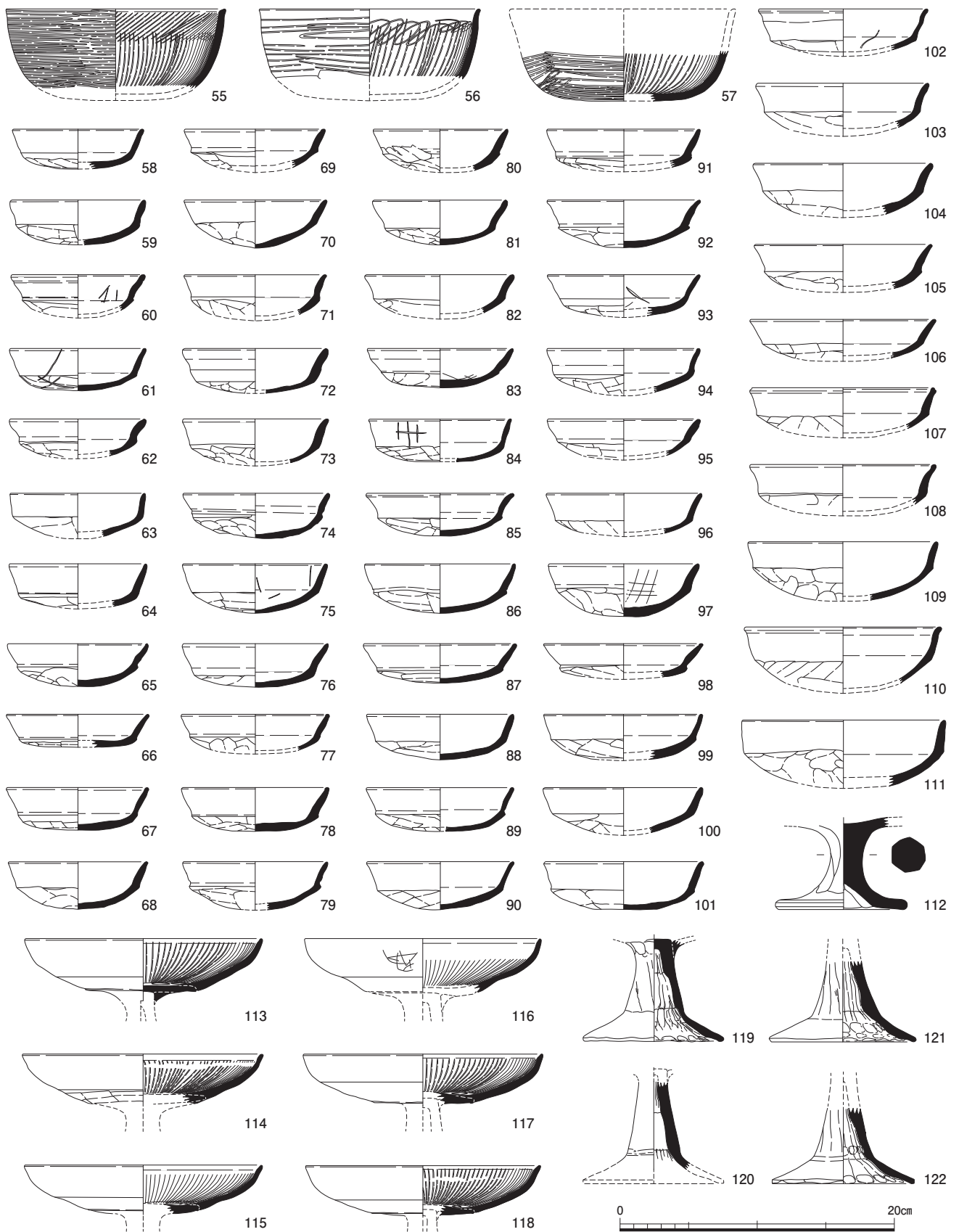


図184 SG100出土土師器(2) 1:4

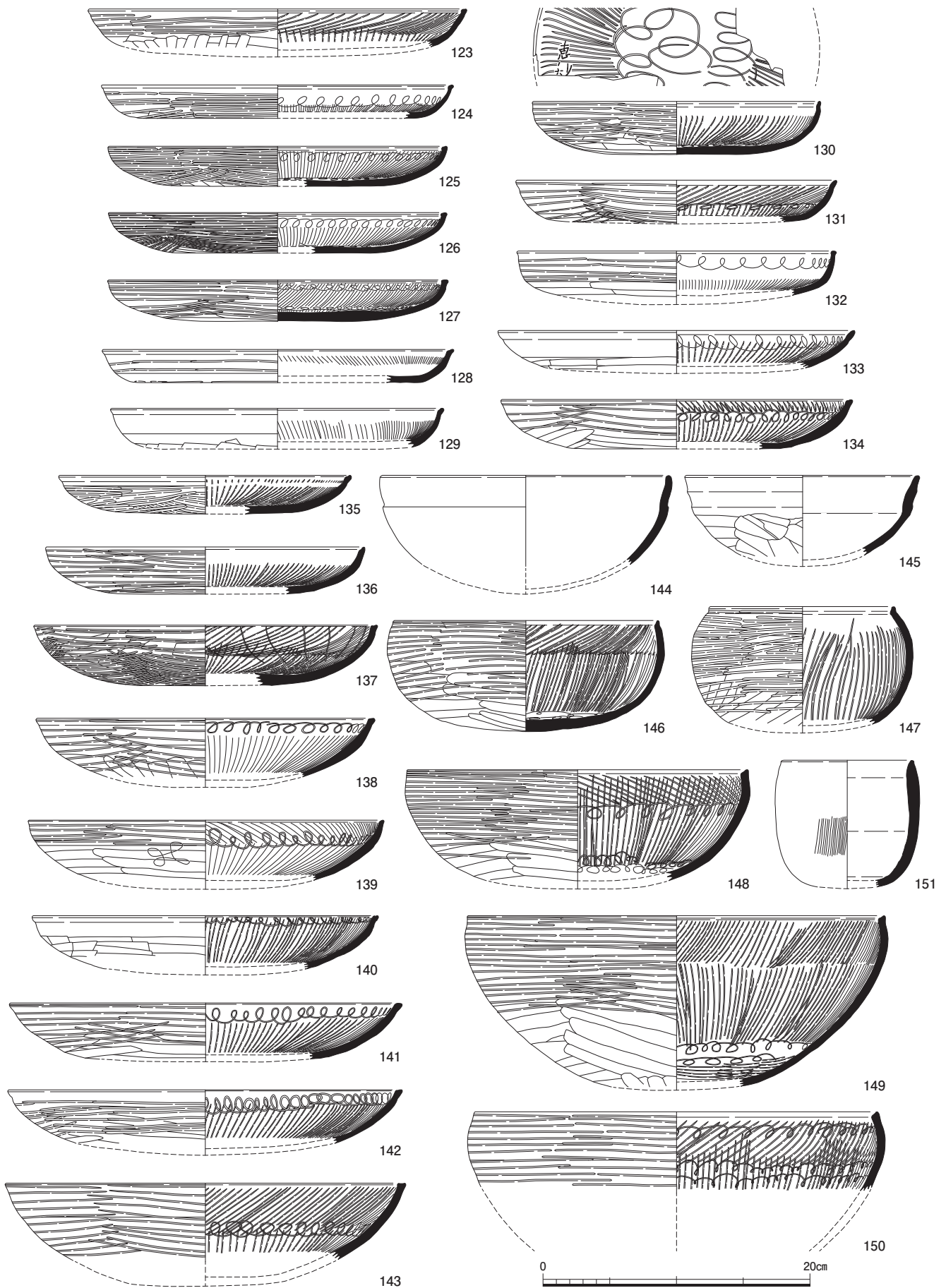


圖185 SG100出土土師器(3) 1:4

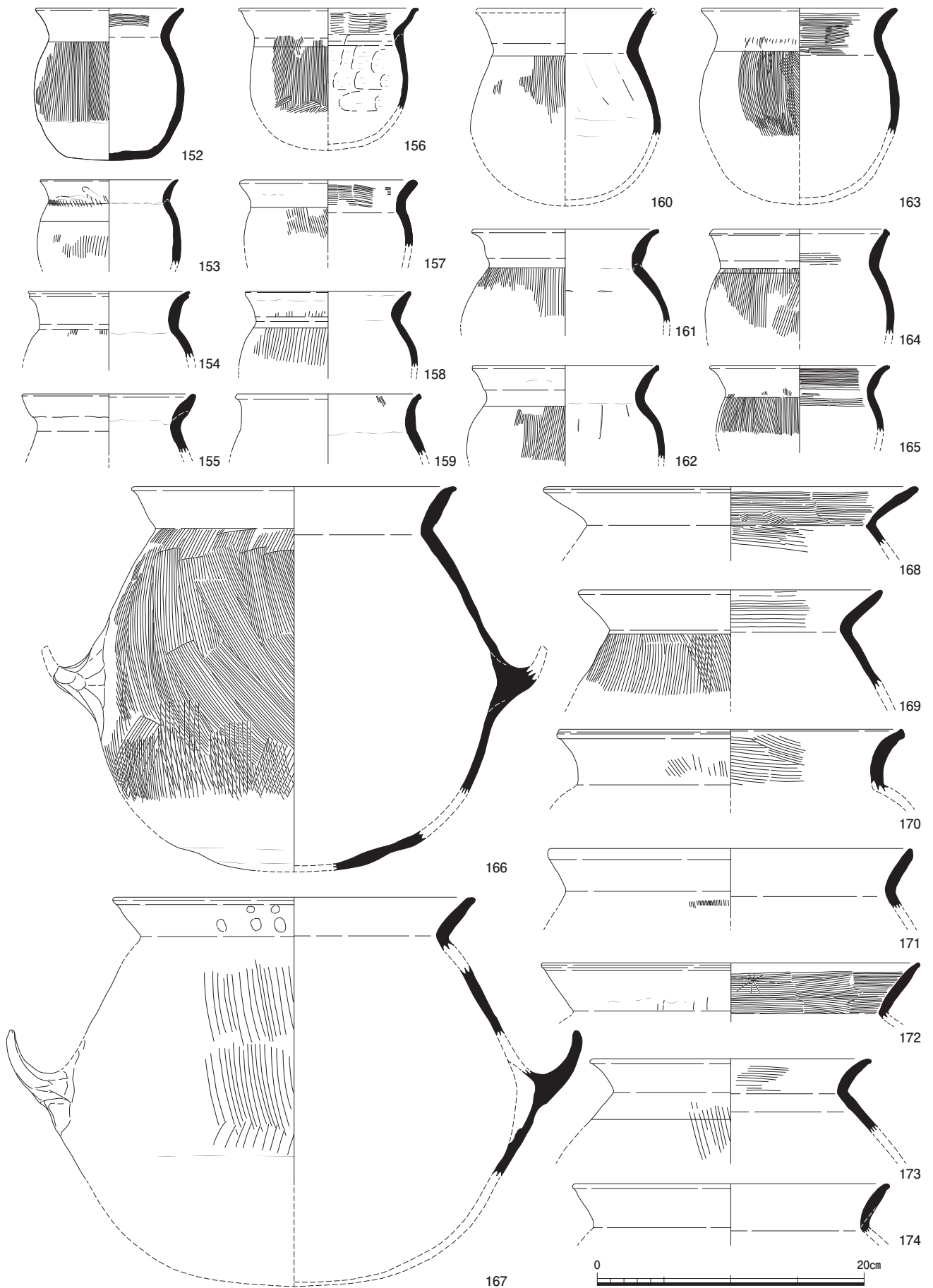


図186 SG100出土土師器(4) 1:4

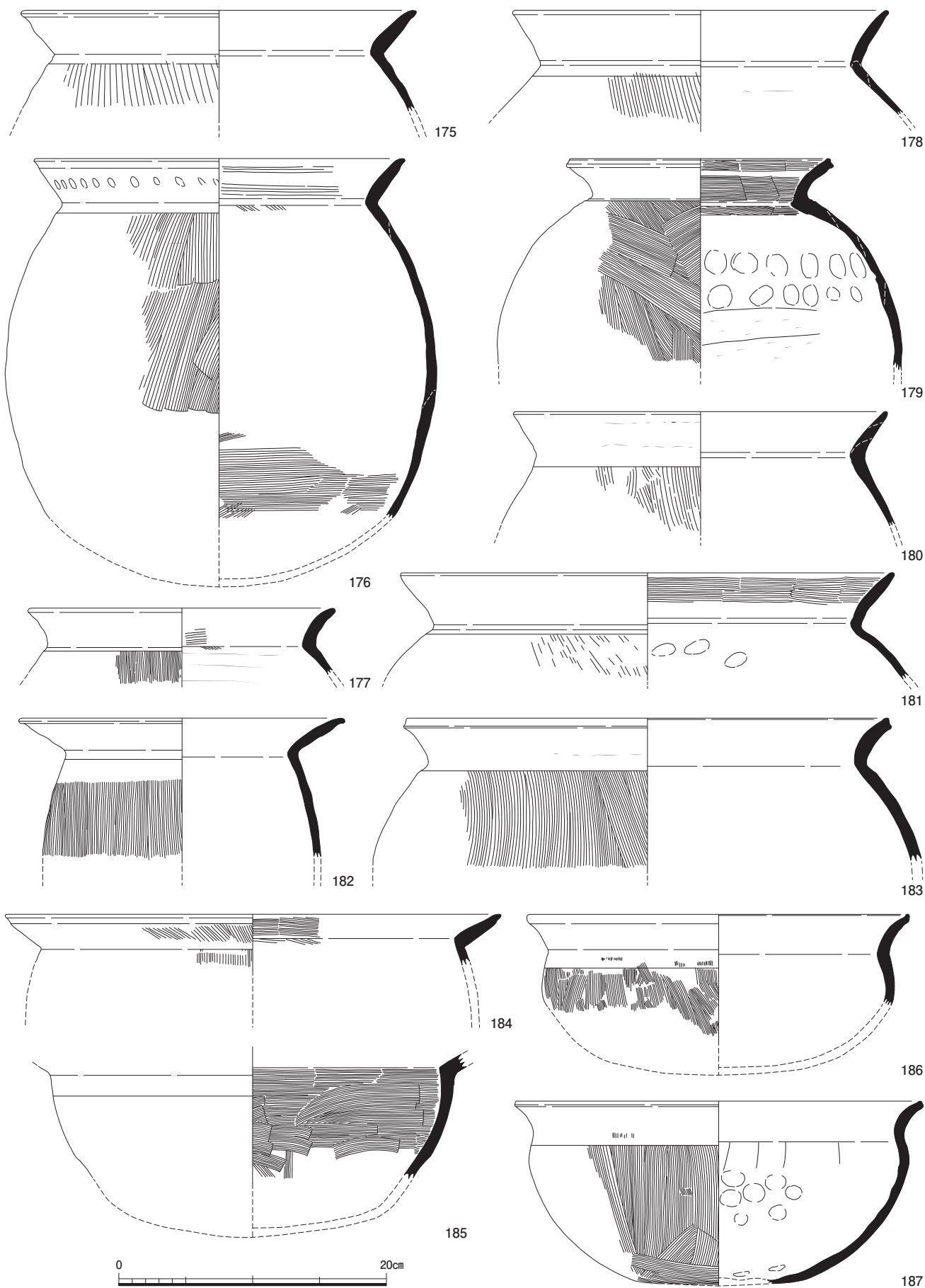


図187 SG100出土土師器(5) 1:4

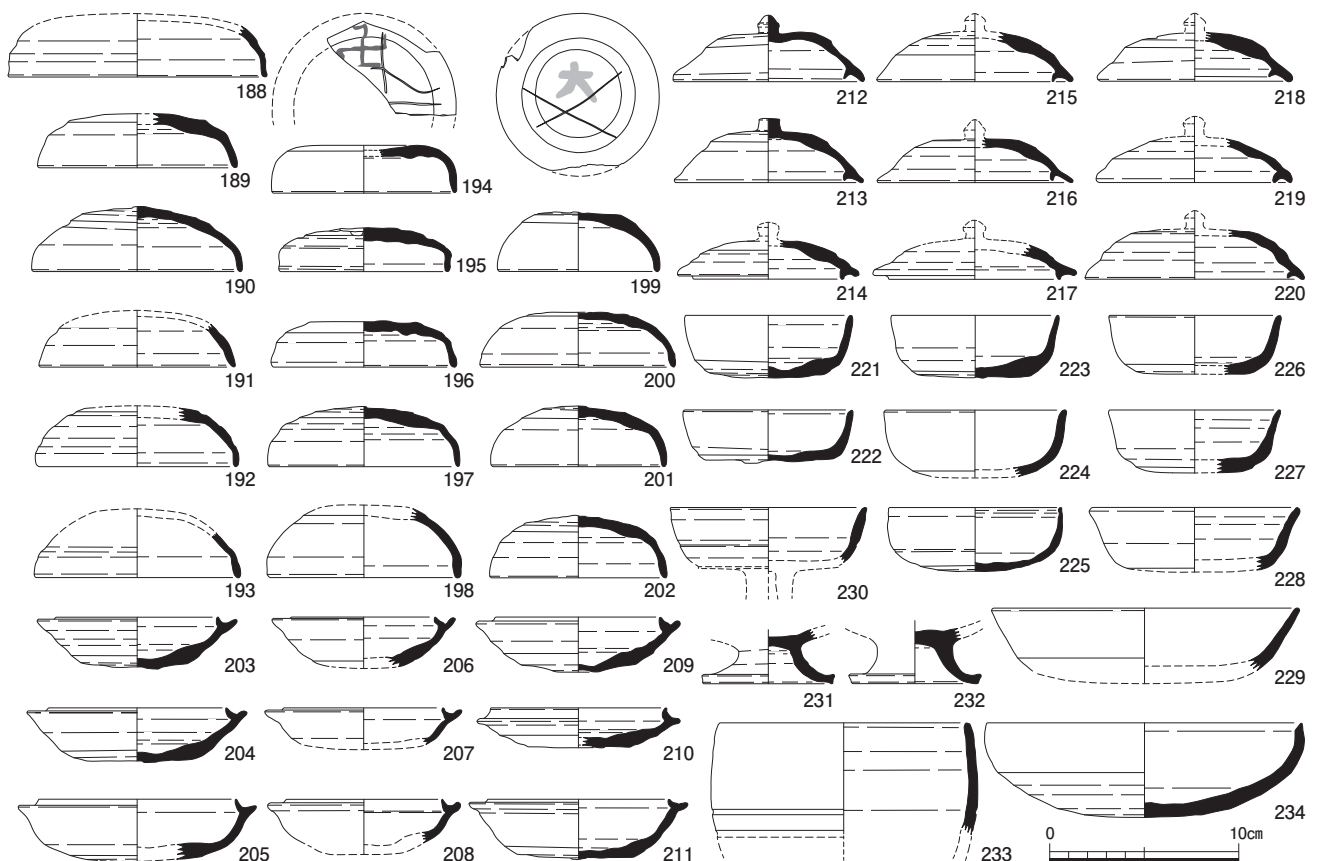


図188 SG100出土須恵器 (1) 1 : 4

ない。特に杯Hの多さが目立ち、土師器供膳具の4割以上を占める⁵⁾。

- ii) 土師器杯Aがわずかながら存在している。
- iii) 土師器皿A・深皿が一定量みられる。
- iv) 須恵器では、杯H・杯Gが供膳具の大半を占める。
- v) 須恵器杯H・杯H蓋と杯G・杯G蓋の比率については、前2者が若干多い。

形態的特徴と調整手法 次に、各器種につき、形態や調整に関する特徴をみておこう。

1) 土師器杯Cでは、杯CⅠ(口径14.5~18.0cm)、杯CⅡ(口径11.5~14.0cm)、杯CⅢ(口径8.5~11.0cm)の法量分化がみられる。口縁部が8分の1以上残り、高さのわかる個体の径高指数は、杯CⅠが28.6~33.8、杯CⅡが24.1~30.6、杯CⅢが29.0~35.0である。24.1である2と33.8を示す31、35.0である44を除くと、杯CⅠ~Ⅲのいずれもが28.5~32.3の範囲におさまり、ほぼ相似形をなしていることがわかる。

杯CⅠの調整はb手法のものが多いが、a手法のものもある程度存在する。また、杯CⅠでは、ほぼすべての個体で口縁部にヘラミガキを施す。一方、杯CⅡ・CⅢの調整手法は基本的にa0手法である。

2) 土師器杯Hは、口縁部が8分の1以上残る72点の

うち、60点が口径9.0~11.4cmにおさまる。これは、杯CⅢの口径の範囲とほぼ重なり、また、須恵器杯H・杯Gの口径とも近似する。このように、口径10cm程度の小型食器が、SG100出土土器群の主体をなす。

3) 土師器杯Aは、深い器形に復元できる。口縁端部の形状には、内傾するもの(55)や丸くおさめるもの(56)があり、飛鳥Ⅳ以降の杯Aに一般的な、端部を内側に巻き込む口縁部形状とは異なる。外面にはヘラミガキを密に施し、丁寧な作りである。55の内面には、細かな二段放射暗文がみられるが、56では上段に乱れたループ暗文を施しており、杯Aに二段放射暗文が定着する前の様相を示している。

4) 土師器皿A・深皿は、平らな底部から、口縁部が丸みをもって立ち上がる形状である。口縁端部に平坦面や内傾面をつくるものが主体で、端部を内側に巻き込み肥厚させるものはほとんどみられない。内面の暗文に関しては、放射暗文に加え、ループ暗文を施文するもの(124~127・131~134・138~143)も多く、暗文構成が定まっていない状況が看取できる。

5) 須恵器杯H・杯H蓋・杯G・杯G蓋では、188・205・228のようなやや口径の大きなものもみられるが、それ以外の個体の口径は概ねよくまとまる。杯H・杯H

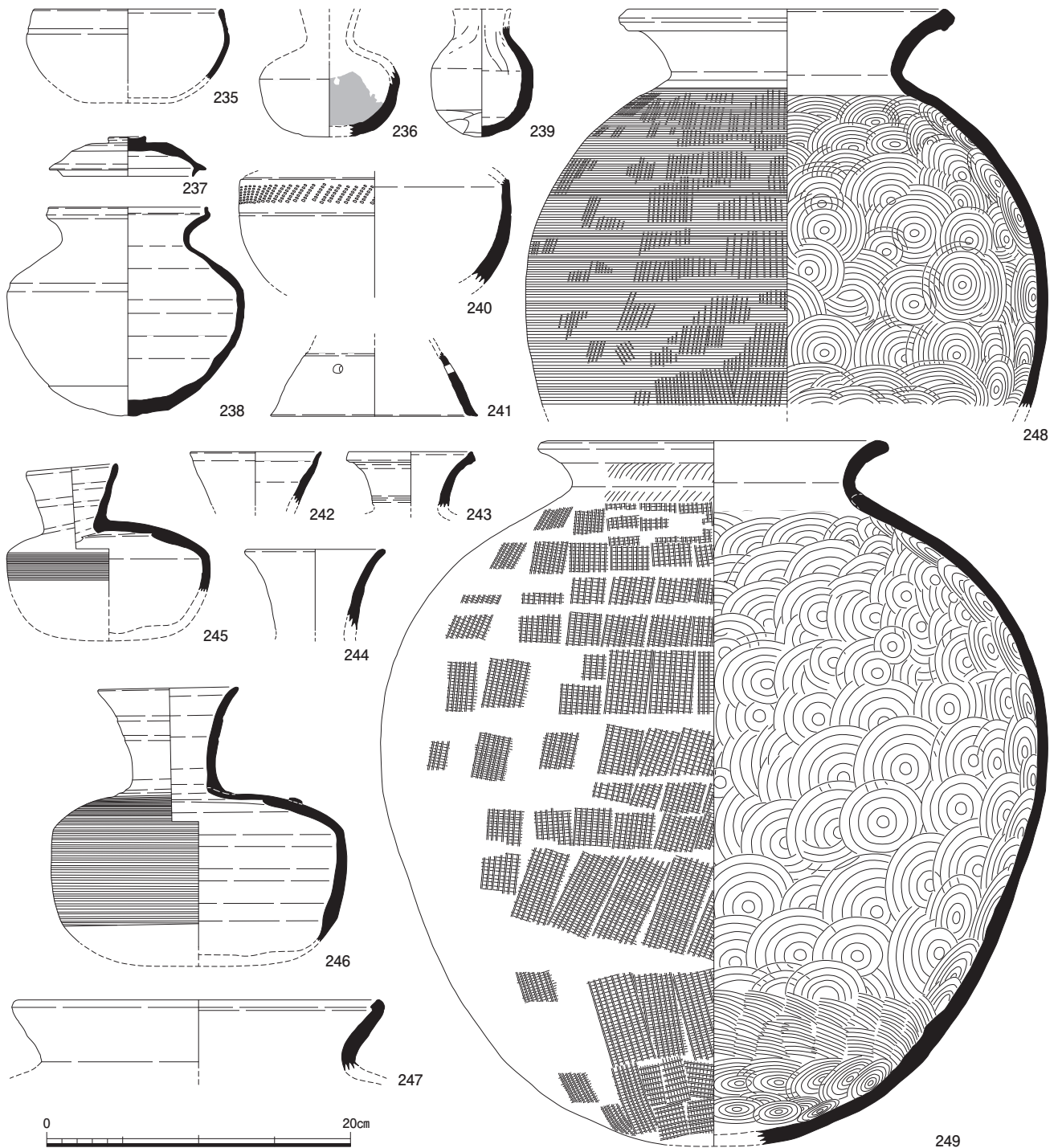


図189 SG100出土須恵器(2) 1:4

蓋・杯Gの底部・天井部の外面調整については、195・224・225を除き、確認できる個体はすべてヘラ切り不調整である⁶⁾。

刻書や記号の線刻 土師器供膳具に多くみられる。焼成後に施された「卍」(1・12)や「知」(28)、「恵妙」(130)などの刻書は、寺院との関わりがうかがえる。

4 池SG100出土土器群の位置づけ

ここでは、坂田寺池SG100出土資料とその前段階の資料と考えられている飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層(以下、灰緑色粘砂層)、甘樫丘東麓遺跡SK184(以下、SK184)から

出土した土器群の特徴を比較することで、飛鳥地域でのSG100出土土器群の位置づけを確認したい。

① SG100から出土した土師器杯Cは、灰緑色粘砂層・SK184出土の杯Cより、浅いものが主体である。SG100の杯CⅠ～Ⅲでは、径高指数が確認できる27個体のうち、28.5～31.5の範囲におさまるものが20個体あり、7割を超える。灰緑色粘砂層やSK184出土の資料には、このような径高指数の杯Cはほとんどみられず、より深い器形が主体である。

② 灰緑色粘砂層・SK184出土の土師器杯CⅠでは、外面調整は大部分がb手法である。SG100の杯CⅠでも、

表28 SG100出土土器の器種組成

土師器

用途	器種	調整	個体数		比率 (%)	
供膳具 (85.3%)	杯C I	不調整	8	23	4.2	12.1
		ケズリ	14		7.4	
		不明	1		0.5	
	杯C II	不調整	10	11	5.3	5.8
		ケズリ	1		0.5	
	杯C III	不調整	15	20	7.9	10.5
		ケズリ	3		1.6	
		不明	2		1.1	
	杯G			5	162	2.6
	杯H			72		37.9
	杯A			3		1.6
	皿A			5		2.6
	深皿			4		2.1
	椀			1		0.5
	高杯C			9		4.7
	高杯H			1		0.5
	鉢			8		4.2
煮炊具 (14.7%)	甕		26	28		13.7
	鍋		2			1.1
合計			190			100.0

須恵器

用途	器種	調整	個体数		比率 (%)	
供膳具 (71.9%)	杯H蓋	ヘラ切り	7	11	13.2	
		不明	4		7.5	
	杯H	ヘラ切り	6	9	11.3	
		不明	3		5.7	
	杯G蓋			9	17.0	
	杯G	ヘラ切り	5	7	9.4	
		ロクロケズリ	2		3.8	
	椀			2	3.8	
	鉢			1	1.9	
	高杯	長脚		1	1.9	
		短脚		3	5.7	
貯蔵具 (28.1%)	壺		3	10	5.7	
	壺蓋		1		1.9	
	甕		1		1.9	
	平瓶		2		3.8	
	甕		3		5.7	
	合計				53	100.0

※用途の比率では、各器種の蓋を除外した。

b手法が主体であるが、a手法のものも散見し、灰緑色粘砂層・SK184出土資料と比べると、a手法の割合が増加している。

③ 灰緑色粘砂層・SK184出土の土器群にはみられない土師器杯Aが、SG100出土資料には少量ながら存在している⁷⁾。

④ 灰緑色粘砂層・SK184出土資料ではわずかしみられない土師器皿類が、SG100の土器群では一定量出土しており、器種組成において、一定の割合を占める⁸⁾。

⑤ 土師器高杯Cの杯部については、SG100出土資料の方が、灰緑色粘砂層・SK184出土のものより若干浅くなっている。

⑥ 須恵器杯H・杯H蓋・杯G・杯G蓋の口径に関しては、灰緑色粘砂層・SK184とSG100出土資料で、分布範囲に重なる部分があるが、SG100出土の須恵器には、前2者の土器群にはみられない、より小さな個体が含まれる。具体的には、口径8cm台・9cm台の杯H蓋、蓋が当たる部分の径が9cm台前半の杯H、口径が9.0cm以下の杯Gのような小さな個体が、SG100出土の土器群には存在する。

⑦ 須恵器杯Gの底部外面調整をみると、灰緑色粘砂層・SK184出土資料では、ロクロケズリがヘラ切り不調整より多い。一方、SG100の杯Gでは、大半がヘラ切り不調整である。

以上、①～⑦に示した特徴の違いを勘案すると、SG100出土土器群は、従来考えられていた通り、灰緑色粘砂層やSK184出土土器より新しい様相をもつといえる。土器様相の差異に着目すると、器種組成の中に土師

器皿類が一定量存在する点が大きな変化であろう。飛鳥Iと飛鳥IIの土器様式は、SG100とそれ以前の土器群にみられる、このような器種組成上の様相差を主な基準として区分することができる。従来、SG100出土資料より古くみえる土器群を、飛鳥Iの範疇で考えてきたが、その段階設定は、飛鳥地域の7世紀の土器様式の変遷を捉えた区分として適当である。

5 難波地域出土の土器との関係

次に、古代において、飛鳥と並ぶ国家的要地である難波地域から出土した土器と、SG100出土土器群との対応関係を検討する。ここでは、主に須恵器杯類を検討対象として用いる。

図190は、難波地域の土器編年⁹⁾において、難波Ⅲ中段階の標式資料である難波宮跡水利施設第7層と難波Ⅲ新段階の標式資料である難波宮跡北西谷第16層ほか出土の須恵器杯類と、SG100出土の須恵器の受部径・口縁部径を比較したものである。

図をみると、SG100と水利施設第7層の須恵器では、杯類各器種の受部径・口縁部径の範囲が重複する部分が多い。また、杯H・杯H蓋・杯Gの底部・天井部の外面調整は、両土器群ともヘラ切り不調整が主体となる段階にあたり、共通した様相を示す。さらに、土師器に皿がみられるようになる点も含め、両資料群の土器様相には類似性が認められる。これらのことから、SG100と水利施設第7層の土器群の間には、それほど大きな時間的差異を見積もることはできないであろう。

ただし、水利施設第7層の須恵器杯類には、SG100の

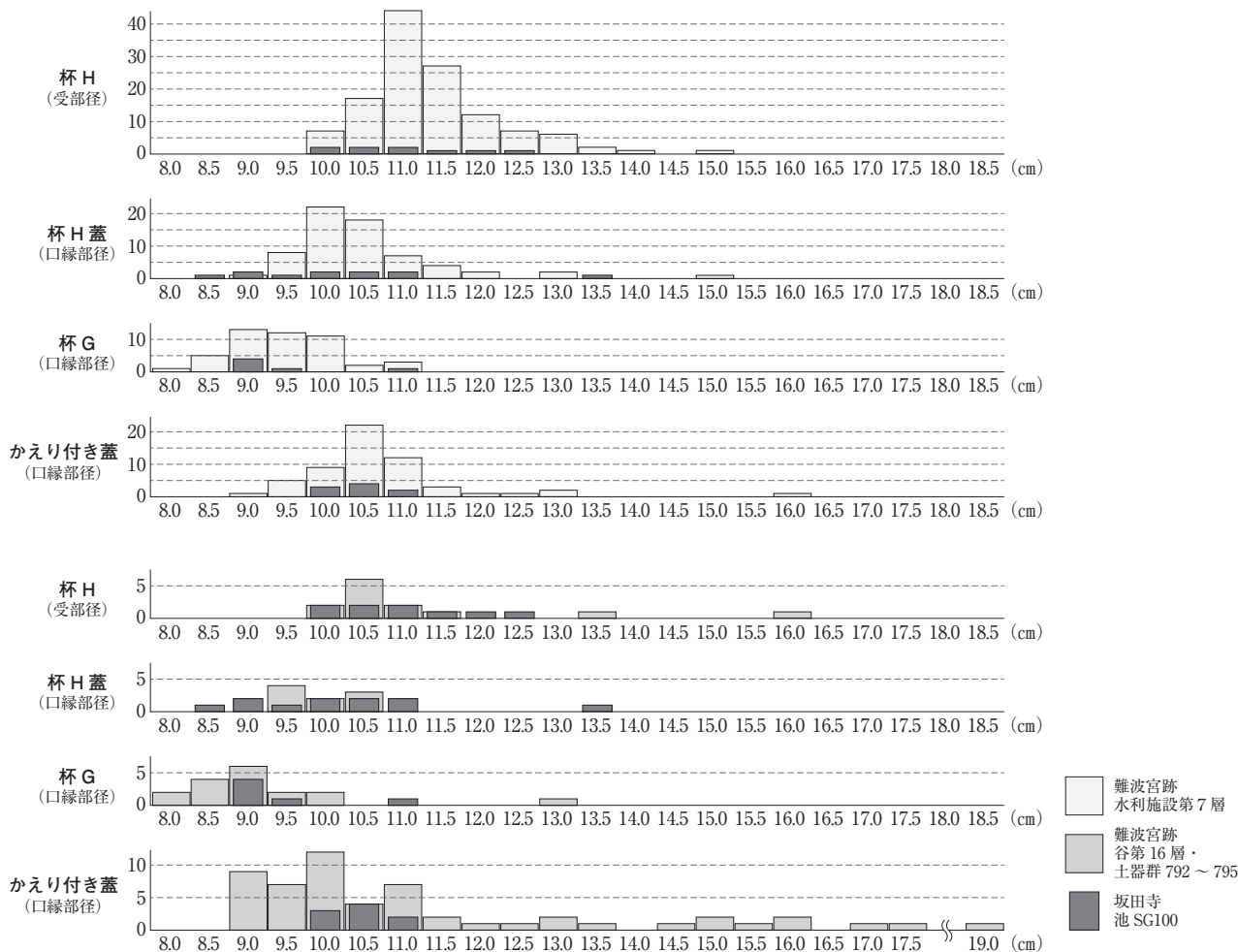


図190 須恵器杯類の大きさの比較 (註9論文をもとに作成)

土器群にはみられない、受部径が13cm台～14cm台前半の杯Hや、口縁部径が11cm台後半～13cm台前半の杯H蓋・杯G蓋(かえり付き蓋)といった径の大きな個体が含まれている。また、水利施設第7層出土資料では、杯H・杯H蓋が杯G・杯G蓋より多く、残存状況も前2者が後2者に比べ、はるかに良好である。一方、SG100出土資料では、上述のように、杯H・杯H蓋が杯G・杯G蓋より若干多い程度である。

以上のような、両土器群にみられる共通点や相違点を踏まえると、SG100出土土器群は、水利施設第7層出土土器群よりやや新しい特徴をもつと判断できるが、両資料群が示す土器様相の想定年代幅については重複する部分も大きいと考える¹⁰⁾。

次に、難波宮跡北西谷第16層ほか(以下、谷第16層)から出土した土器群と比較すると、谷第16層出土の須恵器杯G・杯G蓋には、SG100のものより口径の小さな個体

がみられ、大きさの縮小化が進んでいることが読み取れる。また、谷第16層出土資料では、杯G・杯G蓋の出土量が、杯H・杯H蓋より多く、さらに、脚台の高い杯Bやそれに被ると考えられる口径が14cmを超える蓋を含む。以上より、谷第16層出土資料は、SG100出土土器群より新しい特徴を有するといえる。

6 年代的位置づけ

最後にSG100出土土器群の年代的な位置づけについて、言及しておく。飛鳥・藤原地域出土の土器群のうち、SG100出土土器群の暦年代を考える上で基礎となる資料は、下記のとおりである。

A) 山田寺下層SD619・整地層出土土器

SD619は、南門南方の整地土下で検出された大溝。『上宮聖徳法王帝説』裏書によると、舒明天皇13年(641)に、山田寺造営のための整地が開始された。

B) 藤原京西三坊坊間路側溝出土土器

西三坊坊間路を埋め立て建立された本薬師寺は、天武天皇9年(680)の発願。『日本書紀』によると、持統天皇2年(688)には、当寺にて無遮大会がおこなわれた。

C) 藤原宮下層運河SD1901A出土土器

SD1901Aは、藤原宮造営のために掘られたと考えられる運河である。土器とともに出土した遺物には、天武朝末年頃(682~685年)の木簡が含まれる。

また、甘樫丘東麓遺跡土層SX037出土土器が、乙巳の変(645年)に関わる資料であるならば、それも参考にできよう(D)。

飛鳥・藤原地域出土の土器群は、山田寺下層SD619・整地層(A)、甘樫丘東麓遺跡SX037(D)→飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層、甘樫丘東麓遺跡SK184→坂田寺SG100→(水落遺跡貼石遺構周辺)→大官大寺SK121→藤原京西三坊坊間路側溝(B)、藤原宮下層運河SD1901A(C)の順で、土器様相の変遷が考えられている。これらを時間的前後関係に置き換えた場合、各土器群が示す土器様相に、それぞれどれほどの時間幅を想定するかで、SG100出土資料が示す土器様相の想定年代も変わってくる。

上に示した土器様相の変遷とA~Dの資料を考慮すると、坂田寺SG100の土器群に代表される飛鳥Ⅱの始まりが、650年代前半を遡ることはないと推察できる。その年代が、650年代半ば以降となる可能性も十分に考えられるが、飛鳥Ⅱの始まりが7世紀第3四半期のうちにあったことは確実であろう¹¹⁾。

なお、本稿は、JSPS科研費26770277に拠る研究成果の一部である。

(若杉智宏)

謝辞

難波宮跡出土土器の資料調査に際しては、大阪市教育委員会の佐藤隆氏、大阪府文化財センターの三好孝一氏、大阪府教育庁の三好英樹氏に格別のご配慮を賜った。記して感謝します。

註

- 1) 「坂田寺跡の調査」『藤原概報3』1973。
- 2) 本報告資料のうち、黒色粘土層出土ではない(または、黒色粘土層出土の土器片と接合しない)土器は10点ある。その内訳は、バフン層出土のものが5・20・115・117・120・238、黒色土上層出土のものが92・103・112・209である。
- 3) 尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要2016』。
- 4) 個体算出は、口縁端部が8分の1以上残る資料をもとに

している。高杯は脚部のみであっても、裾部が2分の1以上残るものについては1点と数えた。また、個体数の少ない椀や壺、甕などは、口縁部の残存率が低いものでも、他の部位の残存状況が良好な場合は1点とした。

- 5) 檜隈寺跡でも、飛鳥藤原第159次調査で出土した土器について、土師器杯Hの割合が高いことが指摘されている(『紀要2010』)。調査地が、ともに渡来系氏族に関わりの深い地域である点は興味深い。
- 6) 195の天井部の外面調整は、ロクロケズリではないため、表28では「ヘラ切り」として数えている。
- 7) 甘樫丘東麓遺跡SX037出土資料の中に、深い箱形となる土師器杯が存在しており(『藤原概報25』1995、98頁Fig.71の19)、これを杯Aの祖形とみることもできる。ただし、SX037の土師器には、杯類の口縁部形状や暗文の様相などが、飛鳥地域に通有の土師器の特徴とは異なるものが多くある。そのため、SX037の土師器を、他の飛鳥地域出土の土師器と同一系統のものとして、単純に捉えることは難しい。以上の理由により、ここでは、SX037出土の箱形の土師器杯を飛鳥Ⅳ以降に一般的となる杯Aの祖形とみる立場はとらない。
- 8) 器種組成の算出にあたっては、口縁部残存率8分の1以上のものを基準としているため、杯類に比べ口径が大きい皿A・深皿は、表28中の数値がそれほど大きくはない。ただし、図185にあるように、図化可能な皿A・深皿は、灰緑色粘砂層・SK184出土の土器群よりはるかに多く、食器組成の中で、皿類が一定量存在している状況が看取できる。
- 9) 佐藤隆「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』吉川弘文館、2014ほか。
- 10) 佐藤隆氏は、水利施設第7層出土土器を、飛鳥Ⅰ新段階から飛鳥Ⅱにかけての時期に位置づけている(前掲註9)。
- 11) SG100出土土器群の暦年代観は、前期難波宮造営期に比定されている難波Ⅲ中段階の年代推定にも関することから、前期難波宮の造営過程を考察する上で重要である。前期難波宮は内裏地区の南に広大な朝堂院を備えた宮殿として復元されるが、その壮麗な宮域は、朱鳥元年(686)の焼亡時の姿を示しているに過ぎず、朝堂院地区を含めた主要な宮域が孝徳朝に全て完成していた、という決定的な考古学的証拠は、現段階では見いだせない。

飛鳥Ⅱの始まりを650年代前半と考えた場合、SG100と水利施設第7層出土資料との関係から、前期難波宮の造営が孝徳朝に始まったとみることは可能である。しかし、難波地域では、SG100出土資料より新しい土器様相をもつ難波Ⅲ新段階においても、活発な人的活動が続いていたと想定でき(佐藤隆「難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか」『大阪歴史博物館研究紀要』第15号、大阪歴史博物館、2017)、飛鳥遷都後も宮内の主要殿舎の造営が続いていた可能性は充分にある。今回、SG100出土土器群の詳細があきらかになったことで、孝徳朝の難波宮の姿や前期難波宮の造営過程、ひいては7世紀における古代宮都の変遷についても再考の余地がでてきたといえよう。

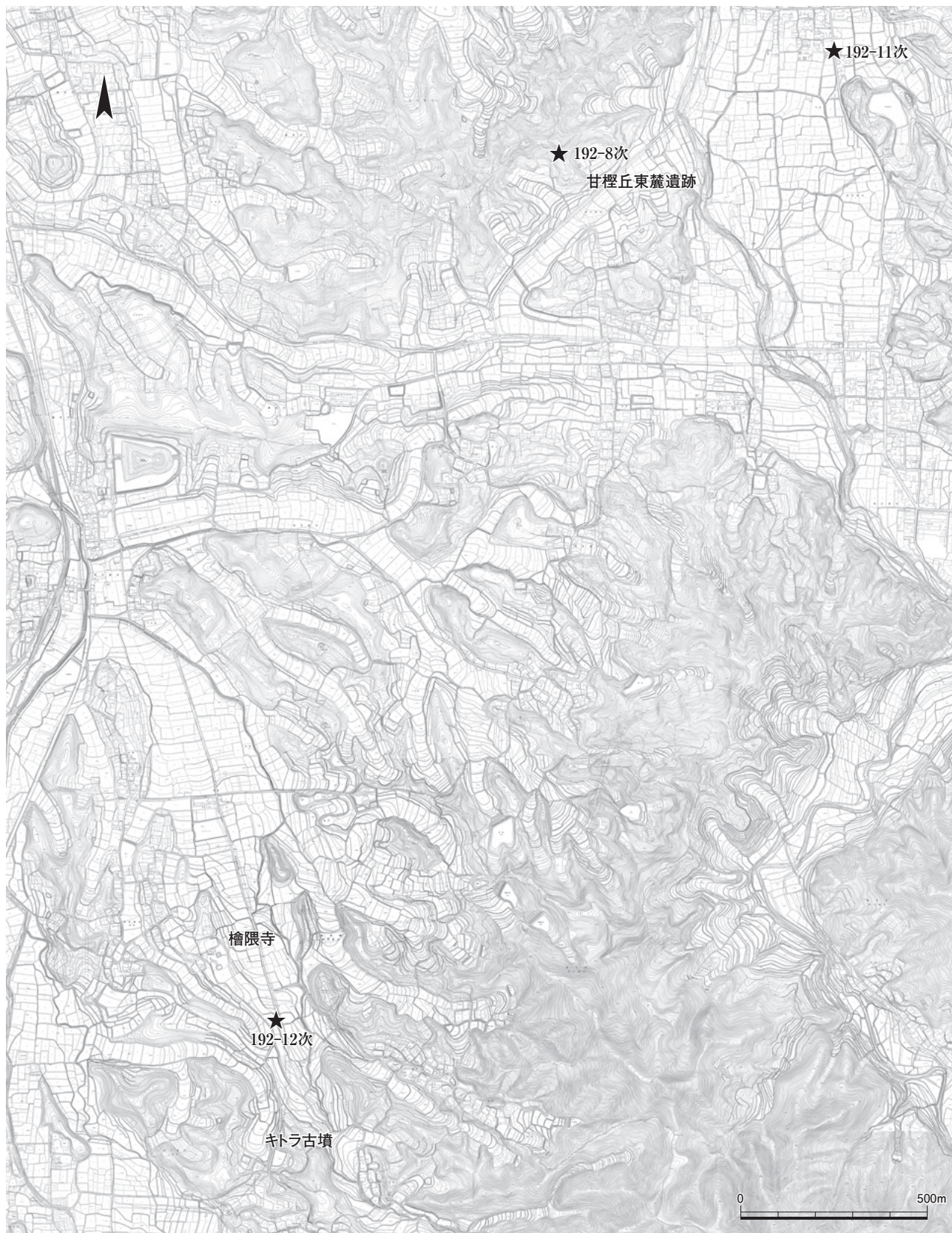


図191 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000